

モロコシなどの新大陸での作物の栽培知識の教授を得た。1621年の秋は、十分な収穫が得られたので、ピルグリムファーザーズはワンパノア族を招待して、神の恵みに感謝して共にご馳走をいただいた。これが感謝祭の起源であるとされる。アメリカ市民は皆この由来を知っているが、今日の感謝祭は親類縁者が集まる大パーティーの日と化しており、交通機関が混み合うことは日本のお盆と同じある。

なお、このような美談にも関わらず、先住民に対する迫害は各地でこの段階からすでに始まっていた。

- 5) 前掲以外の植民地も様々な由来で成立した。一部を書き出しておく。希に出題される。

1629年……【6: _____】(ピューリタン)、ニューハンプシャー

1632年……メリーランド(俗説では聖母マリアにちなんで命名)

1636年……ロードアイランド、コネティカット(ピューリタン、1639年のコネティカット基本法は各邦憲法の模範)

…[略]…

1681年……【7: _____】(ウィリアム=ペンらクエーカー教徒が建設した。)中心都市のフィラデルフィアは、1790年から1800年まで、事実上アメリカの首都だった。

…[略]…

1732年……【8: _____】(イギリスの債務者のための植民地でイギリス本国との関係が深い)。これが最後。

この間にイギリスはオランダが建設したニューネーデルラント植民地※を奪い、1664年、その中心地、ニューアムステルダムを征服、ジェームズ2世(ヨーク・アルバニー公)の名を取って【9: _____】と名付けた。

※ マンハッタン島は1626年、オランダ西インド会社がネイティブアメリカンから24ドル相当のアクセサリで買ったとされている。

- 6) 各植民地の由来は自治植民地、王領植民地など様々で、**目的も宗教もバラバラ。相互の結びつきは全くない**。まさか、将来アメリカ合衆国として一つの国家を形成するとは夢にも思わなかったに相違ない。

13植民地の共通点は、信仰の自由や新天地を求めて移住したことから、【10: _____】(=フロンティアスピリット)に富み、多くの場合、各植民地ごとに植民地議会を持っていた(1619年のヴァージニア植民地の議会が最初)。その流れは2つある。①北部では直接民主制の【11: _____】、②南部では代議制の【12: _____】である。

- 5) ヴァージニア以南の植民地は【13: _____】や綿花を奴隷制プランテーションで栽培し、本国に輸出していたので本国との結びつきが強く、北部のニューイングランドは商品作物がないため自営農民が多く自立性が高く、本国の重商主義政策によって、植民地の商工業が抑圧されていることへの不満が強かった。

- 6) イギリスの13植民地に対する政策の基本は【14: _____】である。13植民地を永久に本国の原料供給地兼市場に止めて置きたかったから、植民地の産業の振興は抑制されるべきだった。産業抑制のための諸立法は年代まで問われるから覚えておこう。羊毛品法(1699)、帽子法(1732)、**糖蜜法(1733)**→砂糖法(1764)、鉄法(1750) 12上智.08W

たとえば、糖蜜法は13植民地がイギリス領カリブ海域産以外の糖蜜(砂糖の副産物でラム酒の原料)を輸入すると、禁止的高関税を課す法。

- 7) イギリスはこれらの植民地に、入植許可を与えた後は、概して放任しており、18世紀半ばまでは、入植者とその子孫たちはイギリスから独立しようなどとは考えもしなかった。

北米に広大な領土を持つフランスの存在がそうさせていた。イギリスは、植民地の人々がフランスと結びつくことを恐れ、植民地の人々を抑圧したり厳密に徴税したり、密貿易を厳重に取り締まったりしなかった。イギリスはこれを「有益なる怠慢」と自嘲した。他方、植民地の人々にも北と西を押さえるフランスに将来何をされるか分からないので、本国イギリスと険悪になるわけにはいかないという事情があった。

- 8) **イギリスはフレンチ・インディアン戦争**(ヨーロッパでは**七年戦争**)に**圧勝** 1755-63 始期を1754年とする本もある。

【15: _____】(1763年)でイギリスはフランスから**カナダ**と「**ミシシッピ川以東のルイジアナ**」(図1のB)および西インド諸島の多くを、スペインから**フロリダ**(図1のD)を得た。

また、【15】でフランスはインドではボンディシェリとシャンデルナゴルを除く他の植民地を放棄、アフリカではセネガルをイギリスに譲った(代わりにダカール沖のゴレ島の返還を受けた)。ミシシッピ川以西のルイジアナ(図1のC)は前年にフランスからスペインに譲られたが(代わりに【15】でイギリスにフロリダを譲った)、1800年、再度フランス領となり、アメリカ合衆国が1803年買収した。

七年戦争後、イギリス国王は先住民との衝突を避けるため**アパラチア山脈以西への植民地の人々の移動を禁じた**。

イギリスは七年戦争で圧勝したが莫大な戦費で**財政困難に陥った!** ↑植民地の人々はこれにも不満

- 9) イギリスはフランスが北米から撤退したので「有益なる怠慢」政策を放棄、1764年の砂糖法を皮切りに、**植民地に対する課税を強化、密貿易を厳しく禁止**して七年戦争の戦費回収を図った。他方、植民地の人々はもはやイギリスの保護下にある意味を見いだせなくなっていた。

1765年【16: _____】……これは翌年撤回させた。「代表なくして課税なし」(パトリック=ヘンリー)

↑植民地での商取引や新聞にまで課税しようとした。

1767年 **タウンゼント諸法**を実施(茶、ガラス、紙、ペンキなどの商品が北米植民地に輸入される時に関税を課す法律)。イギリス商品不買運動起き、1770年には茶を除き廃止された。

1770年 イギリス軍はボストンで発砲事件起こし、植民地の民間人5人を射殺。

1773年 【17: _____】でガマンの限界超える。アメリカへの茶の直送と独占販売権を東インド会社に与える。

大打撃を被ったのは茶の密輸入商人だが、経済活動への露骨な介入に他の人々も怒った。

→→ 【18: _____】(1773年)起きる。

怒った植民地の人々は、先住民に変装して東インド会社の船を襲い、積荷(茶)を海中に投棄。

今日のボストン港では、東インド会社の輸送船(レプリカ)が博物館になっており、ドラマ仕立ての説明の後、実際に茶箱を海に捨てるパフォーマンスを見せる。希望すれば観光客も茶箱投棄体験ができる。実にアメリカらしい。

1774年 イギリス政府は**ボストン港閉鎖、マサチューセッツの自治権剥奪などの懲罰的行動に出た**。

もはや独立戦争の勃発は時間の問題であった。